おてんば七十歳

城夏子

おてんば七十歳
1974・9・10　第1刷発行
著者＝城夏子　発行者＝野間省一
発行所＝株式会社　講談社　東京都文京区音羽2の12の21
郵便番号112　電話　東京03（945）1111（大代表）振替東京3930
印刷所＝慶昌堂印刷株式会社　製本所＝有限会社中沢製本所
© Natsuko Jyo 1974 Printed in Japan
（落丁本・乱丁本はおとりかえします）
（学二）

まえがき

野球はツーアウトからだそうである。では人生は七十歳から――とはどうだろう。冗談じゃない。七十までも生きて、いったい、これから何しようって言うの？　と言われるかしら。ほんとに七十年は長かった。かくも長い歳月という太陽からの贈りものを、わたしはどんなふうに活用してきたのだろう。

ここで一筆自己紹介をしなければならない。わたしを全くご存じないたくさんの方々のために。

さてもわたしの人生暗くはなかったけれ[illegible]いろありました。いろいろあったけれど考えようによっては、何の変[illegible]道を歩いて来たとも言えるだろう。比喩的に表現してみると、まあ、次の[illegible]うになる。

気がついて見たら、いつの間にか袋小路みたいな、でもまあ花をつけた生垣なんかある小径を歩きつづけていた。この道より外に、もっと華やかな、舗装もととのった道もあるだろうとは、知らないわけではなかったが、わたしはなんとなくのんびり歩けるその道が、性にあっていたらしい。舗装もしてない

その小径は、雨が降ればぬかるむし、風が吹きまくれば、眼に埃が入る。でもその時その時に何とか工夫して、苦にもしなかった。袋小路に突き当たると、右に折れる道があった。たいして悪い奴にも会わず、また突き当たると左のほうへ、小径は開けていた。わたしの人生とはこんなものだったようだ。

路傍に花が咲いていれば、それを摘み、どこかの家の中からピアノが流れてくれれば、立ち止まって聴く。開放的な、低い[illegible]スに囲まれた庭の、花の中に人が立っていれば、きれいなお庭ですこ[illegible]と話しかけたりする。長い生涯という道には、道連れもいて、ひとと[illegible]をとって歩いたこともあったが、ひどいつむじ風がきて、その道連れをさらっていってしまった。わたしの嘆きは、しかしやがて消え、気を取り直して、また、花を摘みながら歩いた。なんだかふり返って見ると、年とってるひまなんかなかったようだ。年とったには相違ないんだけど、自分の愛する道を一歩一歩、ころばないように歩くのに精いっぱいで、よその華やかな道を羨んだり、一つことをいつまでも嘆いたり、そういうことが嫌いだったのだ。

そりゃもう、わあわあ大声で泣いたこともあれば、きりきり憤ったこともた

びたびだった。そんな時も、心の一番奥では愉しんでいたのである。ほんとに変な女である。ときたま若い人から、わたしもそういう年のとりかたしたい、なんておだてられるが、ま、心にしわのよらない性格なのかも知れない。

というわけで、晩年、人生の袋小路に突き当たったと思った時、現われたのが今いる老人ホームなのである。

なんでもぱっと考えてぱっときめるたちなので、六十七歳の時、老人ホームへ入ろッときめると、いきなりお役所に電話で問い合わせた。〝東京近辺で一番愉しそうな老人ホームどこでしょうか。小さな土地を持ってますから、入居料はまあどうにかなります〟と言ったら、ご[illegible]を推薦してくれたのである。その一本の電話が新しい人生へと私を導いてく[illegible]〝思い立ったが吉日〟とは、よく言ったものである。

でももしも私が、ドン・キホーテ型でなく、ハムレット型人間だったら、現在の老後は掴めなかっただろう。何しろ多寡の知れた全財産の三分の二を、生涯の生活費としてホーム経営会社へポンと支払ってしまうのである。一年で死ぬか十年生きるか、一種の賭けだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

入って見て、三食昼寝、医療つきが、もしも型ばかりの粗末なものだったら？なんて疑惑でも持つ性格だったら、とても一歩前進はできなかっただろう。

ただし、いくらわたしが即決派でも、即決派だからなおのこと、第一印象を大切にした。その第一印象で飛びついたのが、この敷地の広い花だらけの、五つの棟の建物の姿もハイカラな老人ホームだったのである。

二十代の頃から、門と庭の愉しい家でなければいやだった。

だから、石垣色の鉄平石で囲んだ丈の低い門に近づくと、ぱっと明るく青芝のひろびろした庭と、乱舞するような花々の姿が見えた時、わたしの半世紀昔からの夢が、そこに出現したかと狂喜した。そして今日に至ったのである。

老人ホームの外観はかくて申しぶんなかったが、さて中身――つまり見知らぬ多くの人々と共同生活する日々はどうだったろうか。そのひとつひとつを、この書に偽らず書き記したのである。喜怒哀楽の、どの字に最高点がつくか、読者諸氏よゆっくりとご判断下さい。

さて昨日の朝、事務所に用があって、中央の円形の庭を横ぎるのに、例によってぴょんぴょん馳けてゆくと、池の傍にしゃがんでいた別棟の老男が、ひょい

とわたしを見上げて笑顔になった。つい立ち停って会釈したら、食パンのひと切れを持ったその人は、私に話しかける。池には何十尾かの金魚が、睡蓮の花と戯れているのである。老男はパンをさき、

「おもしろいものですよ。金魚のパンの食べかた、ほら、この大きいのやるでしょ。あんなに群がって来て、うれしそうに引っぱりっこしてるでしょう。ところが、小さくちぎって一疋だけにやると、その一疋もなアんだと、つまらなそうなんです。ほらね。それからあの黒いちっちゃい奴、案外威力があって、彼らが群がってると、絶対赤いほうはパン略奪しに来ません。それからあの中世の貴夫人みたいな、尾鰭の優雅なのね。あれは飼われていたのが放たれたんですね。泳ぐ輪が一定の線にきまってます。水槽時代の習癖なんでしょうか」

仕合わせなご老人だな。金魚に餌をやるんでも、こんなに興味を深く持って愉しんでらっしゃる。このホームにもいろんな老人がいるものだと、私は快い挨拶を交わしてまた馳け出したのであった。

一九七四年梅雨晴れの日に

城　夏子

目次

まえがき

さわやかに老いる……一〇

〝年をとるのはいやですね〟／10
おしゃれを愉しむ／14
アイ　ハヴ　ノー　デート！／22
老語録／28
こんなおばあさんになりたい／33
おじいさんを考える／38
サングラスはしわ隠し／45
エナメルこそは愉しけれ／48

ひとり暮らしのその果ては……三三

少々おめでたい私／53
私の中年期／60
これがまあ、ついの棲み家か／67
後家の頑張り／82
マンションで寂しさがじわじわ／92
老人ホーム、見たり聞いたり／98

愉しきかな老年……一〇八
これがわたしの一週間／108
近頃のおくさんに苦言呈上／136
飲み、食べ、颯爽と嫌う／120
食べず嫌いは大損する／148
洗顔・爪切り・くしゃみ／131
食卓も愉し／163
老人ホームの人間学……一六九
おばあさんは愛らしく／169
私が死んだら……／194
花のホームの愉しみは／178
老女を花に見立てれば／202
ホームの食堂は鶏小舎並み？／183
花のホームで老醜を見た／219
老女の初恋に乾杯！／188

おちゃめ随想……二三〇
ステキな税務署員／230
親の財産、子の財産／235
私はムード派／238
老人屋繁盛記／243
惚れて通おう、松本へ／249
流山よいとこ！／261

装丁・イラスト／長尾みのる

おてんば七十歳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

さわやかに老いる

〝年をとるのはいやですね〟

私をちょっと見た人々は、戸籍上の年齢とは思わないらしい。私自身、心は年がいもなく若やぎっぱなしだし、二十も若い人の着るようなものが好きで、それを着て特に不自然でもなさそうだし（見る人はどう思ってるか知らないけど）、身のこなしはおはねでぴょんぴょん歩くし、まあ、七十歳をあまり意識しなくても許されるつもりでいる。

ところが、この頃やっと気づいたことがある。私を見る人の中に、〝折りあらば七十歳的現象を動かぬ証拠と見つけ出してやれ〟と、手ぐすねひいている人がいたのである。そういう人々の言葉を私は今まで、何気なしに聞き流していた。一度二度は、である。ところが、

同じ人が三度も同じ意を含んだことを言うと、いくら血のめぐりが悪い私でも、おや？　と気づかずにはいられないのである。

例えば二月の温かい日、私はウールのワンピース一枚で、うっかり短いコートも着ずに駅前まで出た。ひとり、バスを待っていると急に冬の風が吹きよせてきて、短いスカートから出たナイロンくつしたの足の寒さ。

「わア寒い、こんなとは思わなかったわ」

と悲鳴をあげたら、すかさず、

「若い人ならそんな短いお洋服でも平気ですよ」

一週間ほどして、レンガ色のスェーターを押入れから見つけ出して着てみた。この色は似合うはずだのに、どうも気に入らない。やはりホームのバスの中で、その人と乗り合わせていたので、そのことを言ったら、大層満足そうな笑顔になって、

「その色はね、ずっと若い人でないと着こなせないでしょう。うちの娘なんかまだ四十ですけど、紺ばかりです」

また別の老婦人は、私が一時間もぶっ通しで三つの部屋に掃除機をかけたので、腰が痛くなったと言ったら、

「そう、お年ですよやっぱり。××さんみたいに坐って掃除機お動かしになったら？」
などと、わたしをいざりにしようとする。昨秋、ウールプリントでマキシを縫ってもらった。マキシは夏から好んで着たので、格好がつくはずだのに、初めての冬の生地で仕立てたそれは、裾のほうに重みがいってしまって、胃やおなかがふくれて見える。ウールに裏がついてるので、夏のもめん一枚のように軽やかには見えないのかと、やや悲観して、それでも遠慮勝ちに駅までのバスに乗った。着なれるために。
例の手ぐすね夫人と乗り合わせたので、性こりもなく私は、
「困っちゃいましたの。なんだかこの服、胃がいやにふくれて見えるでしょ。夏の頃は気がつきませんでしたのにね」
と訴える。夫人は、またしてもうれしそうな笑いを浮かべて言った。
「年をとりますと、ほうぼうに肉がつくものですよ。おなかだの背中だの……」
背中と聞いてびっくりした。つい二、三日前、もう五年も洋服を縫ってもらっている近所のおくさんに、
「城さんはお背中がすウっとしてらっしゃるから、仕立てがラクですわ。中年の方でも、この辺に肉のついてる方、わりにいらっしゃるんですよ」

と、仮縫を合わせながら、私の背中の中ほどを撫でられたばかりだから。

「まあ、背中にも?」

と念を押すと、夫人はゆったりと大きくうなずくのである。

「年をとるっていやですわね」と微笑しながら。

ビールばかり飲むので、コルセットでも外そうものなら、腹部はすいかが入ってるかと思うほど、まんまるくなってしまった。けれど、まさか背中に肉がついてるとは気づかなかった。ほんとかしら?

こんどはまた別の手ぐすね夫人に言われた。

「城さんはよくハイネックをお召しになりますね、やはり年をとりますと、首から胸は露出できませんわね。選び方お上手でいらっしゃる」

私は服の衿も性格と同じで、オールオアナッシング、ハイネックか、首の線ぎりぎりの衿なし、夏には思い切って大きくくって胸を露出する。Vネックや中途半端のボート型にくったのは大嫌いである。何も首の老いをかくす下心なんかなかった。四十歳の看護婦さんは同じことを次のように言う。

「城さんハイネック似合いますね。お年とった方、あんまりハイネック着ないでしょ。××

さんがハイネックや中国服着たらどんなかしら。ハハハハ」

六十九歳と四十歳とでは、感じ方がこんなに違うのだろうか。

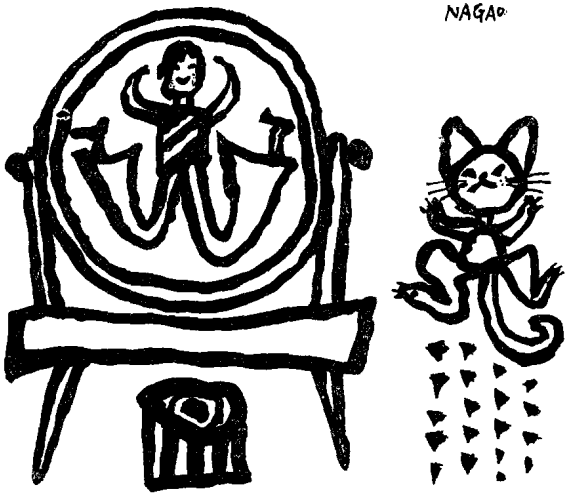
意地悪ばあさんなんか、言いたいこと言わしとけばいいわと、超然としていればいいようなものの、私も女、背中に肉がついてるなんて言われて、いささかプライドを傷つけられたものである。よオし、こんど玄関で出会ったら、膝なんか一ミリも曲げずに板の間へぺたんと両手のひらをつけて見せてやろう！　手が汚れる心配なんかするものか。

「こういうの、おできになる？」

などと、まあ自分の年にしては若いということを証明するのに、躍起となる、これが老女の虚栄というものかも知れない。自戒自戒。

おしゃれを愉しむ

おしゃれをほんとに愉しむようになったのは、やはり四十歳も半ばすぎてからだと思う。そしてその頃の私は、黒、青、黄、が大嫌いだった。見ただけで顔をそむけた。黒は誰にでも似合い、顔をきれいに見せる、なんていうのは大嘘で、黒ばかりは美人中の美人でないと



着こなせるものではないと、私は確信していた。

青も肌の抜けるように白い人でないと似合わない。黄色なんか、色そのものが黄色人種であることを証明するだけであろう。おまけに意地の悪い色だと、私は確信し、大嫌いだった。気に入った服地を見つけても、ちょっぴり黄色が入っていると、もう駄目。

ところが、である。

老人ホームに入る少し前、つまり六十代の後半になって、なんと私は青に親しみをおぼえはじめた。色が黒いから——と、敬遠していた私に、自信を持たせたのは、藍(あい)地に朱、黄、緑、白、で鮮やか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo